

算命学中庸

【初年】 57 回目

57 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【天中殺論】 (3)

【初年】 57 回目 【天中殺論 (3)】 「宿命中殺」 01

前回 56 回目 【天中殺論 (2)】 03 頁につぎの呼称を記載しました。

「運命天中殺」を「後天天中殺」 こうてんてんちゅうさつ

「宿命天中殺」を「宿命中殺」 しゅめいちゅうさつ

通常は短縮形を用います。

そして、これからは「天中殺」を「中殺」と表現することが多くなります。これらの短縮形を記憶にとどめてください。

天中殺 ⇒ 中殺

☞ 天中殺は「運勢が寝ているとき」「運勢が休止しているとき」という話があり、「天中殺は受け身で過ごすが良い」と前回の授業で書きました。

☞ 「こうてんてんちゅうさつ後天天中殺」と「しゅくめいちゅうさつ宿命中殺」は異なります。

「後天天中殺」は、誰にでもまわって来る天中殺です。

「後天天中殺」には、陰陽で 20 年間の大運天中殺がありますが、たいうんてんちゅうさつ大運天中殺はまわって来る人と、まわって来ない人がいます。どの天中殺でも、天中殺がめぐ巡ってきた期間は受け身で過ごすことが求められます。

「後天天中殺」は後天運でまわって来る天中殺で、限られた期間があります。

☞ 宿命中殺は、生まれたときから、自分の宿命のなかに存在している天中殺です。

前回の授業では、宿命中殺をもつ 2 人を記載しました、市川海老蔵は生まれながらに「生年中殺」をもっています、こう こうけつ江 宏傑（福原愛の結婚相手）は「生月中殺」をもっています。

宿命中殺は、生まれたときから、自分の宿命に存在する天中殺なので、しょうがい生涯（生まれてから死ぬまで）自分と共にあります。

その意味で「一生、受け身を求められる宿命」です。

「宿命中殺」 ^{いっしょうがい} 一生涯続く



一生受け身を求められている

受身で過ごすことができれば……禍が出たとしても、
最小限で済ませることが出来ます。

☞ 宿命中殺もっている人は、「すべて……何事にも、
受け身で対処しなければいけないのでしょうか？」

そういうことではありません。

何に対して受け身なのか、それは宿命中殺の種類によって
違ってきます。

参考・対処 [ある事柄、状況に応じて、適切な処置をとること]

❖ お金に対して、無欲でなければいけない人もいま
す。

❖ 人物でいえば、子供に対して無欲でなければなら
ない。親に対して無欲、あるいは、配偶者に対し
て無欲でなければならぬとかもあります。

❖ 仕事に対して無欲でなければならない。ということもあります。

宿命中殺の人は、一生を通して、不完全・不自然なわけです。

不完全・不自然という意味では、その事柄で不利な条件を背負うことになります。

不利なハンディキャップを背負いながらも、普通の人と一緒に水準で生きて行かなければなりません。

宿命中殺をもつ人物は、どのようなことを求められるのでしょうか……？

〔たとえば〕宿命中殺をもつという部分を〔肉体的に欠陥をもっている〕というふうに置き換えて考えるとどうでしょう。

肉体に欠陥があっても、その人物が普通の人と対等でおなじ水準、あるいは、それ以上に活躍して生きて行くには、どのような状況・状態を求められるのかということです。

環境・生活などの事柄もあると思いますが……、
なによりも必要なのは、精神の強靱きょうじんさを求められるといえるでしょう。

そうでないと、障害に負けてしまうかもしれません。

参考・強靱 [強くてねばりのあること。しなやかで強いこと]

聴覚に問題があり耳が聞こえないとか……さまざまな姿があります。

肉体のどこかにハンディをもちながら、普通の人と一緒にマラソンレースに出場するとか、何かの競技に参加するときには、強い精神力、強固な忍耐力が不可欠な条件です。

宿命中殺をもつ人と、競技者の人たちがおなじということではありません。

宿命中殺をもって人生を歩む過程では [相当に精神力が鍛えられる] と考えています。

しかし、その人の生き方によりますから、必ずとは言いきれません。

なぜなら、宿命どおりに生きていない人の場合には精神力は鍛えられないのです。

☞ ハンディキャップを背負って、宿命どおりに生きている、あるいは、宿命どおりに生きようとするのであれば、精神の強さは不可欠であるために、強靱きょうじん

な精神力を備えなければなりません。

それゆえに、不利な条件をもちながら、宿命どおりに生きている人は、精神力・忍耐力の強い人です。宿命中殺をもつ人は、宿命のどこかに不完全を抱えていますから、不完全な状況に追い込まれるとチカラを発揮します。

宿命中殺をもつ人は、不完全な環境で力を発揮する人。
それは宿命の良さでもあります。

参考・精神力〔精神をささえている力。精神の強さ〕

☞ そうしますと、不完全・不自然な環境というのはどのような状況・状態なのでしょう。

〔たとえば〕子供にとっての親というのは、両親がそろっているのが完全な状態です。

両親がいない、あるいは、片親がいないとすれば、不完全です。

宿命中殺をもつ人物は、そのような状況下のほうがチカラを発揮します。

実際に、宿命中殺をもって世の中で活躍している人はとても多いです。

そして、宿命中殺の人は、震災などでまわりの環境

が異常な状況になると非常に頑張^{がんば}るのです。
異常な環境になると、活躍しはじめるとか、チカラ
を発揮するのが宿命中殺の人です。

震災のような異常な状況なとき、それをきっかけに
頑張る子供もいます。

何かの震災が起きたときには、落ち込んでしまっ
て駄目になる子供もいます。

〔たとえば〕いままでは成績も良く、性格も良くて、
将来が期待されていた子供がいたとします。

しかし、片親が震災で死亡したことによって、落ち
込んでしまう。そういう子供もいるわけです。

☞ 「宿命中殺」と「純濁法の濁」は混同しやすいの
です。

❖ 宿命中殺は、不完全・不自然な状態のときに強い。

❖ 純濁法の濁の宿命は、動乱に強い。

ここの解釈は難しいところといえます。

宿命中殺に人にとって、自分を取り巻く環境が動乱と
か、平和とか、そのことは直接関係していません。

宿命中殺をもつ人は、不自然・不完全・不安定とかの状況に強いのです。

では……自然・完全・安定しているという状況とはどういうことでしょう。

〔たとえば〕仕事でいえば、今日1日働いて、明日も働けるのであれば、安定して働ける場所があるということです。その代表は公務員といえるでしょう。公務員という仕事のなかで、忙しい部署という話もありますけど、それと混同しないでください。

公務員として安定しているけど、上司に恵まれなくてパワハラに遭っているとか、何かどこかが欠けている状況・状態という意味の動乱です。

休日なのに、忙しくて休む暇もないほどの動乱だからといっても、必ずしも何か欠けて、不完全ということではないはず。それとは別です。

何か欠けてしまう状況、それは不完全の状態と考えます。その意味での動乱と解釈してください。

〔たとえば〕母親が「母としての役目を果たさない」といってもさまざまです。

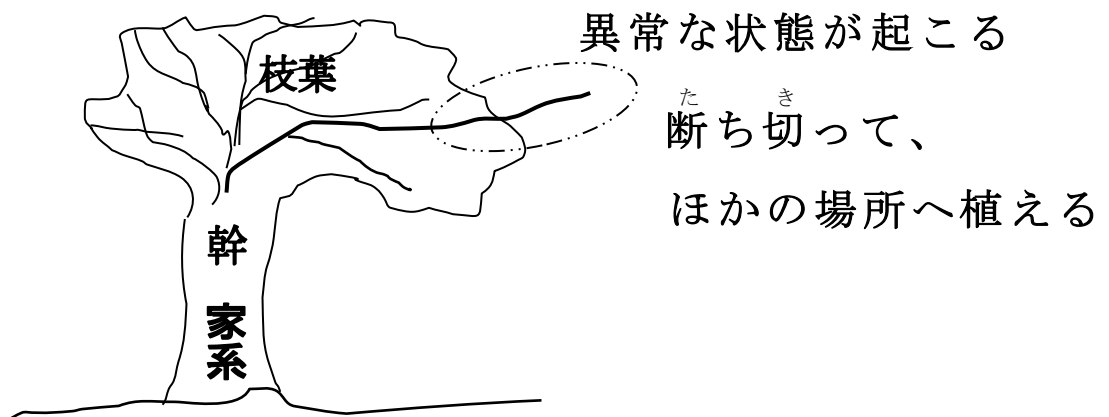
母親がパチンコに通いつめて、子供の面倒を^み着ない

となれば、自然ではない状況です。

あるいは、母親が病気なので、母としての役目を果たしてもらえないとか……そこのところの判断は難しいのですが「親子のあいだに当然あるべき母と子のきずなが^{うす}薄い」[母と子の^{えん}縁が薄い]という状態がつくられているとすれば、子供にとっては動乱です。

〔たとえば〕 1本の樹木があるとしします。

宿命（1）樹木



この樹木の幹を「家系」という言い方をすれば——人間は樹木のなかにある「枝葉」と考えることができます。


「家系ってなに？」ということにもなりますけど、難しい部分です、あとで説明しますので、お待ちください。

樹木の枝葉の部分を一人一人の人間だとおもってください。ここでは家系を一族の流れとします。

この樹木の枝葉のなかに〔中殺を受けている人物〕がいるとします。中殺を受けるということは、その人物に異常な状態が起こります。

異常な状態になって、どのようなことが起きるのかといえ、その1つは駄目になるということです。

宿命(1) 樹木の家系のなかに、中殺を受けている人がいると、順調に伸びることができないという状態が起こります。それは真っ当に^の伸びないで変形してしまうとか、枝が^の延びすぎてしまうのです。

異常な状態が起こる 
 枝葉の中で延び過ぎて困る状態
 変形して、うまく成長しない状態

^{えだ}枝が異常に伸びてしまうと、家系という^{みき}幹が^さ裂けるとか、倒れてしまうこともあるでしょう。

そうなると困りますから、〔例え話ですが〕異常に^の延びた枝を断ち切って、ほかの場所へ移植するということです。延びた^{えだ}枝にとって、家系という幹から切り離されてしまうことは動乱ですが、移植された場所

で安定して育つこともあるわけです。

上記の説明は〔例え話〕ですが……実際に植木の世界では、台木に
ほかの優良種ゆうりょうしゆの枝をつぐ「枝接ぎえだつ」をします。

中殺の意味は〔不自然・不融合な状態〕です。

宿命に中殺をもって生まれた人物は、自分が生まれ
た家系に居座ると、その人自身に、あるいは源みなもとの
家系に不自然な状況がつくられます。

その姿にはさまざまな状態があるわけですが、いず
れにしても異常な状況・状態が起きてしまうのです。

どのようなことが起るのかといえば、家系のなかには、
さまざまな枝葉（人物）が存在します。

しかし、家系という幹からはみ出した枝葉（人物）と
いうのは、多くの枝葉のなかにおいて、一本の異常
な質を宿やどした枝葉なのです。

その一本の枝葉だけが、立派に伸びて成長してしま
うと、幹が傾いたり、倒れたりしてしまい、ほかの
枝葉が駄目になってしまうということも起ります。
家系が全滅するという非常にきびしい状況も起こり
得ます。ゆえに、家系になかで中殺をもつ不自然な

人物が延びてしまったときには、何人も死ぬという事態が状況によっては起きることがあります。

ふつうは何人もの人間が死ぬという大きな禍わざわいが起こることはないと思います。しかし、環境・状況によっては起り得ると考えています。

その影響は、家柄が大きければ大きいほど、その禍わざわいの事象も大きく出ます。

＊日本国で最も大きな家柄は天皇家です。

じょうこうあきひと

上皇明任様は宿命中殺をもっています。

上皇様の宿命中殺は「生月中殺 せいげつちゅうさつ」です。

☞ 「宿命中殺」は生まれながら宿命のなかに存在する天中殺と書きました。 参照⇒56回目【天中殺論(2)】 05

☞ 「宿命中殺」はいくつもあります。

せいねんちゅうさつ せいげつちゅうさつ せいじつちゅうさつ
「生年中殺」 「生月中殺」 「生日中殺」

しゆくめいにちゅうさつ しゆくめいさんちゅうさつ しゆくめいぜんちゅうさつ
「宿命二中殺」 「宿命三中殺 (宿命全中殺)」

ごかんちゅうさつ どういつちゅうさつ そうごちゅうさつ にちざちゅうさつ
「互換中殺」 「同一中殺」 「相互中殺」 「日座中殺」

これらの宿命中殺については、順次ご説明していきます。

✽ ^{じょうこうあきひと} 上皇明任 (令和天皇の父・平成天皇) 1933(s8)-12-23

6 歳 運

	癸	甲	癸		貫索	天胡	一旬	6	癸亥
子	亥	子	酉	石門	貫索	龍高	二旬	16	壬戌
丑	甲			天将	調舒	天禄	三旬	26	辛酉
	壬	癸	辛				四旬	36	庚申
							五旬	46	己未
							六旬	56	戊午
							七旬	66	丁巳
							八旬	76	丙辰
							九旬	86	乙卯

必ず「天中殺範囲」を書いてください。

平成天皇は「子丑天中殺」です。

月支（子）が中殺されています。宿命中殺は『^{せいげつちゅうさつ}生月中殺』です。

月支（子）が中殺されていますから、月干の「甲木」も、月支（子）の二十八元に入っている〔癸水〕も天中殺範囲になります。（子水）の上も下もすべて中殺されます。

上皇のご兄弟は、ご自分も含めて7人います。

しかし、かなりの方が死んでいます。

ご自分の上に姉が4人いました。

ご自分と常陸宮様ひたちのみやと島津貴子様がありますが、その上の3人は早くに亡くなっています。

上皇様のご兄弟には、ほとんど子供が生まれていません。このような事象が起るわけですから、すごい犠牲のうえに家系が成り立つということです。

天皇家の場合、上皇ご自身が中殺をもった枝葉です。その枝葉の部分であるご自分を家系(家系の跡継ぎ)にしているわけでは、ありません。

本来であれば、家系を出て、どこかへ行けばよいのですが、天皇家では民間人のようにはいきません。それゆえに、多大な犠牲がでてしまうわけです。

🔍 56回目【天中殺論(2)】の授業では、「天中殺範囲」の説明で ⇒ [たとえば] 午未天中殺④は生年中殺。

辰巳天中殺⑤は生月中殺。 辰巳天中殺⑥は宿命二中殺。

戌亥天中殺⑦では、天干と地支の二十八元も含めて天中殺範囲になります。このような内容で概略をご説明しました。

参考として、2人の宿命を記述しました。

市川海老蔵は「生年中殺」

江宏傑は「生月中殺」

⇒ 個人の天中殺範囲を知るには、「日干支」が基準です。
 ということで、55回目【天中殺論(1)】で記述しました。

天中殺表

甲寅 51	甲辰 41	甲午 31	甲申 21	甲戌 11	甲子 1
乙卯 52	乙巳 42	乙未 32	乙酉 22	乙亥 12	乙丑 2
丙辰 53	丙午 43	丙申 33	丙戌 23	丙子 13	丙寅 3
丁巳 54	丁未 44	丁酉 34	丁亥 24	丁丑 14	丁卯 4
戊午 55	戊申 45	戊戌 35	戊子 25	戊寅 15	戊辰 5
己未 56	己酉 46	己亥 36	己丑 26	己卯 16	己巳 6
庚申 57	庚戌 47	庚子 37	庚寅 27	庚辰 17	庚午 7
辛酉 58	辛亥 48	辛丑 38	辛卯 28	辛巳 18	辛未 8
壬戌 59	壬子 49	壬寅 39	壬辰 29	壬午 19	壬申 9
癸亥 60	癸丑 50	癸卯 40	癸巳 30	癸未 20	癸酉 10
子丑	寅卯	辰巳	午未	申酉	戌亥
12・1	2・3	4・5	6・7	8・9	10・11

〔たとえば〕 じょうこうあきひと 上皇明仁様の日干支「癸亥」は子丑天中殺です。
 「甲寅 51」～「癸亥 60」までの干支は子丑天中殺範囲になります。

🔍 子丑天中殺の範囲を正しく知るには「干支歴」を用います。

干支歴を見るとわかりますが、各天中殺範囲は、基本的にその年のとし12月4日の節入日～翌々年の2月3日までの2年間になります。

〔たとえば〕2008年2月4日「戊子」～2010年2月3日「己丑」までの2年間が『子丑天中殺』の範囲になります。

2010年2月4日からの干支は「庚寅」に替わりますから……、

『寅卯天中殺』の人であれば、天中殺の年としに入るわけです。

天中殺表

甲寅 51	甲辰 41	甲午 31	甲申 21	甲戌 11	甲子 1
乙卯 52	乙巳 42	乙未 32	乙酉 22	乙亥 12	乙丑 2
丙辰 53	丙午 43	丙申 33	丙戌 23	丙子 13	丙寅 3
丁巳 54	丁未 44	丁酉 34	丁亥 24	丁丑 14	丁卯 4
戊午 55	戊申 45	戊戌 35	戊子 25	戊寅 15	戊辰 5
己未 56	己酉 46	己亥 36	己丑 26	己卯 16	己巳 6
庚申 57	庚戌 47	庚子 37	庚寅 27	庚辰 17	庚午 7
辛酉 58	辛亥 48	辛丑 38	辛卯 28	辛巳 18	辛未 8
壬戌 59	壬子 49	壬寅 39	壬辰 29	壬午 19	壬申 9
癸亥 60	癸丑 50	癸卯 40	癸巳 30	癸未 20	癸酉 10
子丑	寅卯	辰巳	午未	申酉	戌亥
12・1	2・3	4・5	6・7	8・9	10・11

2・3 この数字は、1年間 12ヶ月のなかの2ヶ月間に相当します。2月と3月です。

2ヶ月間というのは ⇒ その年の2月の節入日当日から、4月の節入日の前日までの2ヶ月間です。

〔たとえば〕2010年2月4日「庚寅」～2012年2月3日「辛卯」までの2年間で『寅卯天中殺』の範囲になります。

2012年2月4日からの干支は「壬辰」に替わりますから……、

『辰巳天中殺』の人であれば、天中殺の^{とし}年に入るわけです。

☞ 各月の節入日は、必ず 干支暦 で確認してください。

⇒ ここに **干支歴** の一部を掲載しました。

平成18年(2006)丙戌 ~ 平成21年(2009)己丑 までの

4年間を掲載した「干支歴」です。

平成19年(2007)丁亥			
月	節入日	節月干支	1日干支
2	4	壬寅	丙寅
3	6	癸卯	甲午
4	5	甲辰	乙丑
5	6	乙巳	乙未
6	6	丙午	丙寅
7	7	丁未	丙申
8	8	戊申	丁卯
9	8	己酉	戊戌
10	9	庚戌	戊辰
11	8	辛亥	己亥
12	7	壬子	己巳
1(平20)	6	癸丑	庚子

平成18年(2006)丙戌			
月	節入日	節月干支	1日干支
2	4	庚寅	辛酉
3	6	辛卯	己丑
4	5	壬辰	庚申
5	6	癸巳	庚寅
6	6	甲午	辛酉
7	7	乙未	辛卯
8	8	丙申	壬戌
9	8	丁酉	癸巳
10	8	戊戌	癸亥
11	7	己亥	甲午
12	7	庚子	甲子
1(平19)	6	辛丑	乙未

平成21年(2009)己丑			
月	節入日	節月干支	1日干支
2	4	丙寅	丁丑
3	5	丁卯	乙巳
4	5	戊辰	丙子
5	5	己巳	丙午
6	5	庚午	丁丑
7	7	辛未	丁未
8	7	壬申	戊寅
9	7	癸酉	己酉
10	8	甲戌	己卯
11	7	乙亥	庚戌
12	7	丙子	庚辰
1(平22)	5	丁丑	辛亥

平成20年(2008)戊子			
月	節入日	節月干支	1日干支
2 閏	4	甲寅	辛未
3	5	乙卯	庚子
4	4	丙辰	辛未
5	5	丁巳	辛丑
6	5	戊午	壬申
7	7	己未	壬寅
8	7	庚申	癸酉
9	7	辛酉	甲辰
10	8	壬戌	甲戌
11	7	癸亥	乙巳
12	7	甲子	乙亥
1(平21)	5	乙丑	丙午

🔍 天中殺の範囲を正しく知るには **干支歴** を用います。
17頁に掲載した **干支歴** を参考にして、「天中殺範囲」の
説明をします。

☞ 戌亥天中殺の人であれば――、

平成 18 年 (2006) 2 月 4 日 ~ **平成 20 年 (2008) 2 月 3 日** の
節入日の前日までが『戌亥天中殺』になります。

平成 20 年 (2008) 2 月 4 日 からは、「戊子」の干支に替わっ
て、2月4から「平成 20 年」の新年が始まります。

干支歴における、新年の始まり（節入り日）は、その年^{とし}によって
異なりますけど、干支歴を見ておわかりのように、(2006) (2007)
(2008) (2009) の各年^{かくねん}はいずれも、節入り日は **2 月 4 日** です。
この節入り日から「その年の新年が始まる」わけです。

☞ 子丑天中殺の人であれば――、

平成 20 年 (2008) 2 月 4 日 ~ **平成 22 年 (2010) 2 月 3 日** の
節入日の前日までが『子丑天中殺』の範囲になります。

平成 22 年 (2010) の干支歴は表示されていませんけど……、

平成 22 年 (2010) の節入り日は **2 月 4 日** になっているのです。

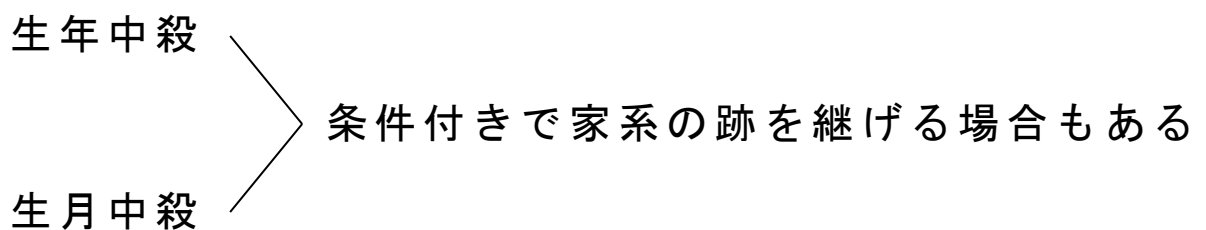
天中殺範囲を正しく知るには **干支歴** をつかいます。

⇒ 「生年中殺」と「生月中殺」は異なります。

「生年中殺」も「生月中殺」も、宿命中殺なのですが、その内容は異なります。その違いをご説明します。

生年中殺と生月中殺は、条件付きで跡を継げる場合があります。

しかし“条件付き”ということは変わりません。



そして、宿命中殺の部分だけが動乱で、宿命全体は平和ということもあります。

⇒ 女性の場合は、宿命中殺をもっている、婿を取るということは、一般的に少ないわけです。

だいたい結婚して家系（実家）の外へ出ますから、その意味で女性は助かります。

家系の外へ出るというのは、実家（生まれた家系）から離れ、他家（ほかの家系）へ嫁いで、婚家先に人間になります。

👉 「生年中殺」 (せいねんちゅうさつ)

「たとえば」 つぎのような宿命中殺をもつ人がいるとします。この人の宿命中殺は「生年中殺」です。

宿命 (1) 生年中殺

乙	丙	丁	日干「乙木」が、年干支の場所が中殺 しています。年干支は親の場所です。 この宿命は親を中殺しているのです。
辰	未	巳	
巳			

「生年中殺」は、年干支の(巳)が天中殺の範囲ですから、地支の(巳火)と同時に、天干の「丁火」も中殺されます。年干支は、人物で誰の場所かといえは親の場所です。年干は父の場所、年支は母の場所ですから、「年干支」は両親の場所です。

「生年中殺」は親を中殺していますので、親が不自然な状態になります。(親を不自然な状態へ追い込みます)

「親が不自然な状態になる」という意味を簡単にいえば、日干「乙木」の人物が「親に縁がない」あるいは「親と縁が薄い」という言い方ができます。この人物は親に縁がない人、親と縁の薄い人です。

宿命(1) 生年中殺 の命式でいえば……日干「乙木」の

人物は、「せいねんちゅうさつ生年中殺」というしゅくめいちゅうさつ宿命中殺をもって生まれて来ました。

当然ですが「乙木」には両親がいます。

「乙木」を生んでくれた両親の場所は年干支です。

そこには親として「丁巳」がいます。

ふつうに考えれば、親と子はえん縁があります。

しかし、生年中殺をもつ子供は、親と縁が無いのです。親との縁を薄くしている子供なのです。

宿命(1) 生年中殺 の命式でいえば……、

「乙木」が親を不自然な状態に追い込んでいます。

子供(乙木)のほうから、親との縁を薄くしているのです。それゆえに、この子供は親と縁の無い子供ということになります。

「乙木」が、親を“ちゅうさつ中殺”という不自然な状態にしています。

子供のほうが、自分を生んでくれた親を、不自然な状態へ追い込んでいます。

親は子供から中殺されて、不自然な状態になります。

☞ 間違ってはいけません ⇒ 親のほうは「生年中殺」をもって生まれて来た子供と、縁が薄いではありません。親のほうが、子供と縁が薄いということではないのです。「生年中殺」をもって生まれて来た子供のほうが、親と縁が薄いのです。

「生年中殺」をもつ子供が親を中殺していますから、子供のほうから親との縁を薄くしているのです。

☞ では……どうなるのかといえば……。

親を不自然な状態にしている子供は、親を頼ることはできません

ここからの説明は：

生年中殺をもつ子供の親を（親A）とします。

生年中殺の子供を（子供B）とします。

繰り返します ⇒ 生年中殺をもつ子供Bのほうが、親Aとの縁^{えん}を薄くしているのです。

なぜかといえば、子供Bが親Aを中殺しています。

言い換えれば⇒ 生年中殺の子供Bは、親Aを中殺に追い込むのが宿命どおりです。

子供Bは、親Aを不自然な状態に追い込みます。

親 A と子供 B はこのような親子関係なので、子供 B が親 A を頼ることはできません。

子供 B は、親 A との縁が薄いので、親を頼れないのです。

しかし、親 A は、子供 B を頼ることができます。

なぜなら、親 A は、子供 B を中殺していません。

親 A は、子供 B を不自然な状態に追い込んでいません。

〔たとえば〕親 A が^{とし}年を重ねて、誰からも面倒を看てもらうことができない状況であれば、子供 B を頼ることができます。

〔でも、親 A は、子供 B を頼る気持ちにはなれないとも言えるのです〕それはどうしてなのでしょう。

^{たと}喩えていえば……（子供のころの B は、親の自分を親ではないと、思っていた挙動の子供だった）そのように^{おも}想える子供だったのです。

両親は子供 B を育てながら、「この子は自分たちを、親と思っているのだろうか……」そのように感じていたとも言えるでしょう。

つまり、育ててきた親の側とすれば、「自分の子供ではないのでは……」というような、感覚に^{おちい}陥ることもあったのではないかと想定できるのです。

⇒ つぎの事柄は間違えないでください。

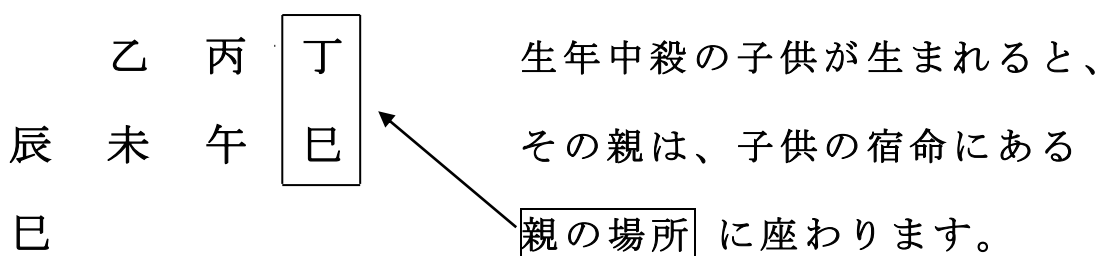
それは「親の面倒をいつなら^み見て良いのか……」という場合の判断につながるでしょう。

⇒ 生年中殺の子供が生まれると、両親は子供の宿命の年干支（親の場所）に座ります。

「生年中殺をもつ子供は親との縁が薄い」と言っていますが、これはどういうことなのかです。

生年中殺をもつ子供が生まれると、両親は自動的に子供の宿命の「年干支（親の場所）」に座ると考えているのです。両親は子供の「年干支」に座ります。

宿命（2）生年中殺



夫婦に「生年中殺」の子供が生まれました。

父は年干（父の場所）、母は年支（母の場所）に自動的に座ってしまいます。

“座らせられてしまう”といえます。

生年中殺の子供は「年干支」を中殺しています。

子供から中殺を受けている場所に、両親は嫌いやでも、自動的に座ってしまうわけです。

ゆえに、親は中殺を受けてしまうのです。

∞ その結果「親と子供の関係はどうなるの……」ということなのです。

生年中殺の子供をもつ親は、子供から中殺を受けている親ですから、自分の子供から不自然な状態にさせられる親になります。

子供は〔中殺している親〕を頼りません。つまり、自分が中殺に追い込んでいる親を頼りませんから、子供は親と縁が無い（縁が薄い）状態になります。

そうしますと、子供が親を頼れない状況のなかで、最も親を頼れない姿とはどのような状態なのかといえ、中殺を受けた親が死ぬことです。

（これは勉強です。ご理解ください）

“親が死ぬ”というのは、片親の場合もあります。両親ともに死ぬということも含まれます。

あるいは、両親が離婚したとなれば、子供の宿命の年干支に両親がそろっていない状態になります。

〔離婚しなければ、年干支に両親が座しています〕

つまり、離婚したことで、年干支は不完全・不自然の状態になるわけです。

「生年中殺」をもつ人には、そのようなことも起こります。

〔たとえば〕親が離婚したとしても、父と母の両方に縁が薄くなるということは少ないです。

どちらかが親権を得ますから、父か母のどちらかと、縁が薄くなるということになります。

母親が親権を取る場合が多いようです。そうすると父親との縁が薄くなります。

あるいは、両親と子供のあいだで（意志の疎通^{そつう}ができない）親子の不仲な状況というのもあります。

これも不自然な状態です。

または、両親（夫婦）そのものが不仲の状態もあります。つまり、子供から親が中殺されて不自然な状態になりますから、生年中殺の子供が両親の仲を裂くということも起ります。

そして、単身赴任の状況も入ります。

単身赴任は両親が別居しているのとおなじ位置づけなのです。

これは両親の仲が良かろうと悪かろうとおなじです。母親は実家に居て、父親はあっちこっちに転勤するという状態も入ります。

あるいは、親が働けない状態、病弱、性格破綻者として、働けない場合も含まれます。

⇒ 「生年中殺」をもつ人は、親の面倒を^み看ないほうがよいのかどうか……それは状況によるのです。

親の面倒を看ないことが、「生年中殺」をもつ人の運勢が良くなるのかどうか……それは個々の宿命によります。

しかし、生年中殺の子供から、親が面倒を見られたら、親のほうの運勢が悪くなります。

なぜかといいますと、「生年中殺」をもつ子供が宿命どおりに人生を歩むには、親を不自然な状態に追い込めば宿命どおりです。ふつうは〔親が駄目になる〕という状況が起ります。

「生年中殺」の人が、宿命どおりに生きるということは、親を不自然・不完全な状態に追い込めばよいわけですから、ふつうは親のほう駄目になります。

☞ ふつう、親のほうがダメになるのですが……、
〔たとえば〕生年中殺の人が、親と一緒に暮らしている
とします。同居です。

生年中殺をもつ人の両親は健在で、夫婦仲も良くて、
社会で活躍しています。

両親がこのような状況だと、生年中殺の人にとっては、
宿命どおりではなくなっているわけです。

つまり、親を中殺に追い込んでいません。

生年中殺の子供は〔親を不自然な状態に追い込む〕
ことが宿命どおりです。

それが出来ない場合、生年中殺をもつ子供は自分の
宿命に反していることになりますから、子供自身の
宿命が壊れます。宿命が崩れます。

宿命が壊れる・崩れることで、子供は「落ち込む」
ことになります。

極端になれば〔死ぬ〕ということも起こります。

子供は、親を不自然な状態に追い込むのが宿命どおり
です。親を追いつめることができなければ……、
自分の宿命が壊れますから、自分が死ぬということ
も起こり得ます。

☞ それでは――どうしたらよいでしょう。

親もほどよく元気で活躍できて、生年中殺の子供も宿命に反^{はん}しない状態は、どのような姿なのかです。子供は、親と縁が無いわけですから、親元（実家）を早く離れることが最良の方法です。

親との縁がないわけですから〔親元を早く離れること〕が最良の決断。自分が中殺している親を頼りません。

しかし、親にしてみれば、我が子ですから、赤ん坊のときに手放すことは、なかなかできないわけです。赤ん坊のときに手放す、それはそれでよい方法なのですが、実際には非常に難しいことです。

それゆえに、おおよそ「社会に出るときまでには、離しなさい」と考えています。

おおよそ⇒社会に出るときまでに手放すことです。

〔たとえば〕高校を卒業して、社会へでるのであれば、そこで子供を手放すことです。

大学を卒業して、社会へでるのなら、そこまでです。それが目安です。

〔たとえば〕留学という選択肢もあります。

生年中殺をもつ人は、自分の親を中殺に追い詰めて

います。それゆえに、親を頼ってはいけないことが基本です。

しかし、ふつうに考えて……留学となれば、留学の費用は親から出ていますから、親から面倒を^み看てもらっていることになります。

生年中殺は親を頼れないということが前提にありますけど〔親から離れて留学する〕という意味では、親が受ける中殺の影響は随分と違ってきます。

どれほど違うのか……その数字はできません。

通常は〔子供は自立して、親から離れる〕というのが当たり前です。

しかし、学生のとくに、子供が親と離れて暮らすのは、不自然な状態として考えることができます。

子供が親と離れて、寄宿舎生活する場合は、不自然な状態として、条件を満たすことになります。

☞ 生年中殺は親を頼れない、という言い方をしますが、生年中殺をもつ人は、親を頼らなくても生きてゆくことができるのです。

生年中殺をもつ本人が、親との縁を薄くしているわけですから、親を頼る必要はないといえるのです。

〔たとえば〕 生年中殺をもつ子供が生まれました。
両親は子供を祖父母に預けて育ててもらいました。
我が子を自分で育てないということは、子供の側に
すれば、実の両親を頼れない状況にいるわけです。
祖父母に育てられた子供の姿は「親を頼ることがで
きなかった」という状態がつけられたわけです。
つまり、親以外なら構わないわけです。
あるいは「親と一緒に暮らしていても、実質的には
祖父母に面倒を看てもらっていた」ということであ
れば、かなり助かります。

「年干支」は親の場所ですから、親は先祖への入り
口でもあるのです。親は先祖の代表です。

🔍 参照⇒ 最大時空間・中時空間、最小時空間 ⇒ 38回目【陰占宿命】

「年干支」の最大時空間^{さいだいじくうかんはんい}範囲は両親が代表であり、
その背後の先祖も含まれます。
生年中殺をもつ子供にとって、祖父母は直接の親で
はないので、ある程度は助かるといえます。
どの程度の数字なのか、それはわかりません。

〔たとえば〕 生年中殺をもつ子供が生まれました。
その子は『天印星』をもっています。
そういうこともあり得るでしょう。

〔天印星〕は赤児の星であり、養子の星ですから、他家の“養子”になれば、実の親から離れるという意味で「生年中殺」も消化できて、天印星の意味合いも消化できますからよいですね。という話になります。

あるいは、生年中殺をもつ子供が生まれました。その子は〔天印星〕と〔天庫星〕をもっています。そうすると、養子の星と、跡取りの星があるということになります。

このような場合は、生年中殺をもつ本人の宿命だけではなくて、本人の親の宿命、養子先の親の宿命を含めて観るようになります。

そうすると〔どこかに不都合な部分がある〕という話にもなってきます。　そうしますと……、

〔何の妨げもなく、星の意味を活かしやすい宿命〕

〔何かの妨げがあり、星の意味を活かしにくい宿命〕があるということです。

それゆえに、運勢を論ずることができるわけです。

以前は「跡取りは、親の後を継がなくていけない」
そのように言われたわけですが、昨今はあまり取り
沙汰されなくなっているようにおもえます。

そして、このような問題は、親と子の関係だけでは、
深く観ていくことができない複雑な部分があります。
ゆえに、実際に上記のような問題があるようなら、
鑑定をなさるとよろしいでしょう。

⇒ 「生年中殺」の子供をもったら、その親が子供の
世話を焼いたり、あれこれ手を掛けたりと、子供に
深く関わることをしないことです。

生年中殺をもつ子供自身に任せればよいのです。

親があれこれ口を挟まないことです。

親のおもいどおりに、育てようとしないことです。

生年中殺をもつ子供の世界に入ろうとすると、親に
対して、子供は拒絶反応を起こすことがあります。
根本的に、親も子供に頼らない生き方をするほうが、
その子供は伸びて行けると考えています。

🔍 参考 ⇒ 【初年】 11回目【宿命と自然】 24ページの 宿命(14)

👉 この文章のなかに「宿命」「運命」「運勢」と書かれています。

親縁がないので早く家を出たためのびのび育った

宿命

親縁がないのは宿命

運命

早く家を出たのは運命

運勢

のびのび育ったのは運勢

宿命 + 運命 = 運勢

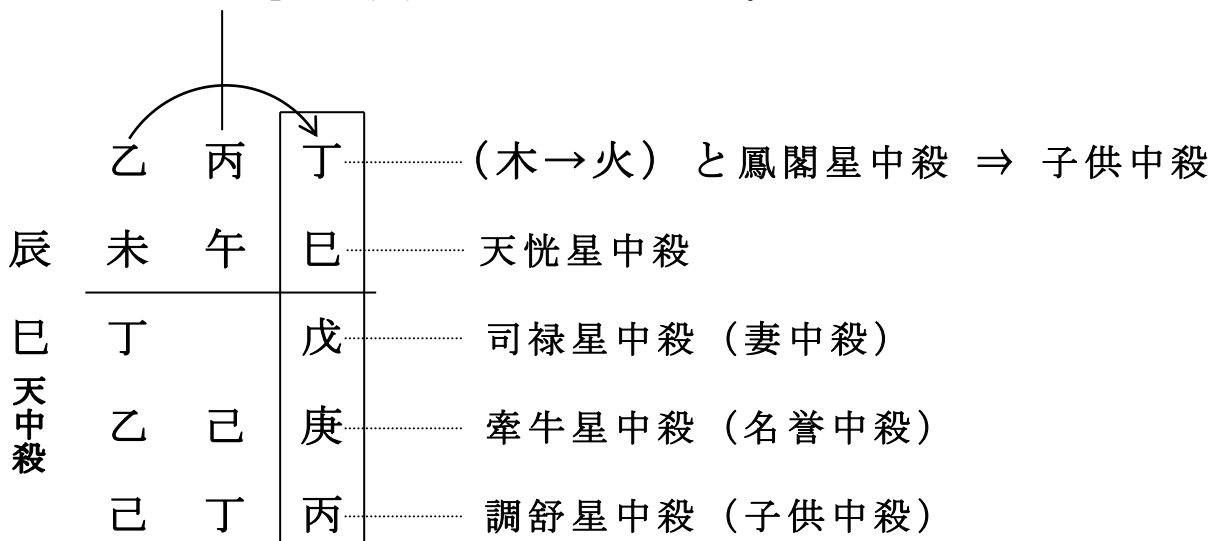
宿命(14)

このような考え方をしています。

☞ [たとえば] 生年中殺をもつ宿命があります。

宿命(3) 生年中殺

月干「丙火」は中殺されていません。



年支（巳火）の二十八元にある蔵干すべてが中殺されます。

「宿命中殺」は『生年中殺』で辰巳天中殺範囲です。

日干「乙木」から 年干「丁火」をみると（木→火）と、鳳閣星になります。鳳閣星も中殺を受けます。

日干「乙木」から、年支（巳火）をみると『天恍星』になります。（巳）は中殺を受けますから天恍星中殺です。

年支（巳火）の二十八元のなかには、[戊 庚 丙] 3つの蔵干すべて中殺を受けます。

そうしますと「宿命全体が中殺を受けるのか……」と

おもわれるかも知れませんが、そうではありません。

それはどういうことかなのかといえは……この宿命のなかには、月干にでている「丙火」と、年支（巳）の二十八元にある〔丙火〕の2つあります。

月干の「丙火」は中殺を受けていません。

宿命のなかでは、「年干支」の「干」、そして（支）の二十八元の〔蔵干〕のみが中殺を受けています。

月干の「丙火」は中殺されていません。このようにおなじ丙火であっても、中殺されないものがあるわけです。

宿命（3）生年中殺 は、日干「乙木」から、ほかの「干」^{かん}を見て、星をだしました。

『十二大従星』も日干「乙木」から、中殺されている年支（巳）を、十二大従星表でみると『天恍星』です。

（巳）は中殺されていますから、天恍星中殺になります。

「十大主星」でいえば、年支（巳）の本元〔丙火〕は中殺を受けています。

日干に「乙木」から、年支（巳）の二十八元の〔戊土〕を見て、星になおすと司禄星ですが中殺を受けています。

司禄星は人物で妻の星です。

その司禄星が中殺を受けているということは、妻中殺になるわけです。

宿命(3) 生年中殺 を見ておわかりのように、年干の

「丁火」は中殺を受けています。

日干の「乙木」から、年干の「丁火」を見ますと、十大主星の〔鳳閣星〕になります。

鳳閣星には〔寿命・sex・子供・目下〕などの意味があります。ここでは特に占う対象を決めていませんので、(子供中殺)としてあります。

(寿命中殺)という意味でも構いません。これは何を対象にして占うのかで、星の意味の取り方は変わります。

日干の「乙木」から、年支(巳)の本元〔丙火〕を見て、星になおすと調舒星です。調舒星は中殺を受けています。調舒星には鳳閣星とおなじように〔寿命・sex・子供・目下〕などの意味があります。ここでは特に占う対象はないので、鳳閣星とおなじ(子供中殺)としてあります。

☞ 35 頁の **宿命(3) 生年中殺** は、十大主星の意味から(子供中殺)(名誉中殺)(妻中殺)と記載しましたが、(寿命中殺)(仕事中殺)(財中殺)でも構いません。

重ねて申しあげますが……中殺の意味合いは、占う対象によって、鑑定者が決めるわけです。このことは現在の段階でわからなくても、必ず理解できるようになります。

☞ 実際に「陰占」で占うときには、十大主星の意味とは別に、『干』を人物かんになおして観ていくことは多いです。それには「六親法」あるいは「十二親干法」じゅうにしんかんぼうという技法をもちいます。それは上のクラスで学ぶことになります。その技法の説明はしませんが、どうぞご了承ください。

☞ 話をもどします。

十大主星の人物ということで、**宿命(3) 生年中殺**を観て、子供は何人いるのかといえ(5人)います。

- ① 年干の「丁火」
- ② 年支(巳)の二十八元にある〔丙火〕
- ③ 月干の「丙火」
- ④ 月支(午)の二十八元にある〔丁火〕
- ⑤ 日支(未)のなかにある〔丁火〕

火性は5人の子供

この人物の宿命のなかには、子供が5人でていますけど……親から中殺を受けている子供は、どの子供なのかということです。

- ① 年干の「丁火」 中殺を受ける子供
 - ② 年支(巳)の二十八元にある〔丙火〕 中殺を受ける子供
- この2人です。ほかの3人は中殺を受けていません。

このようにして見分けることで、子供たちのなかに
〔縁のうすい子供（中殺されている子供）〕と、
〔縁の篤^{あつ}い子供（中殺されていない子供）〕が存在する
という判断につかうこともあるわけです。

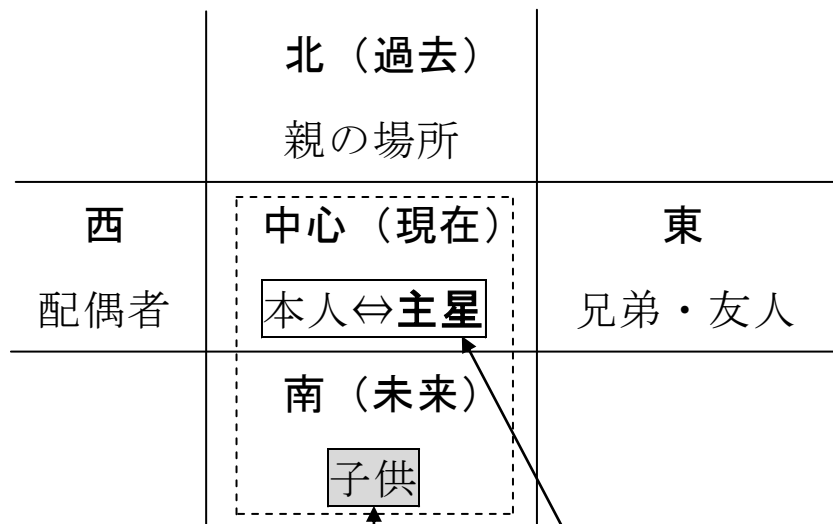
ここまで、中殺を受けている十大主星と人物のつながりを書きました。

つぎに人体図の話です ➡

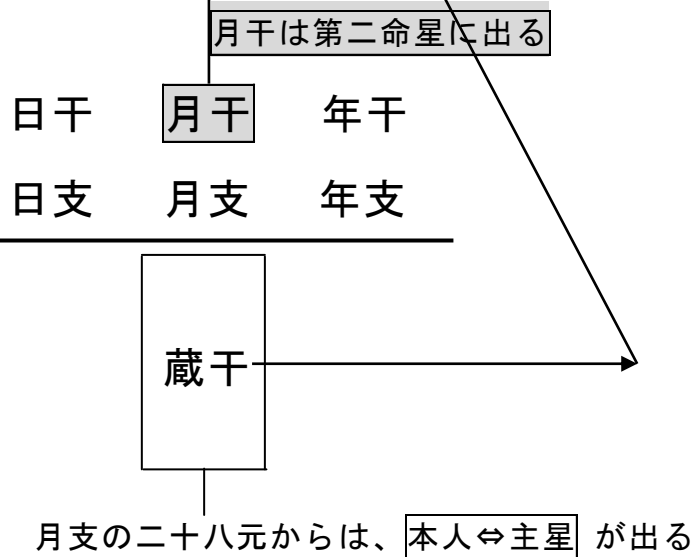
⇒ 「生年中殺」は、人体図のなかで、どの部分なのかと考えます。

参考資料 「人体図の場所と陰占」

陽占（人体図）



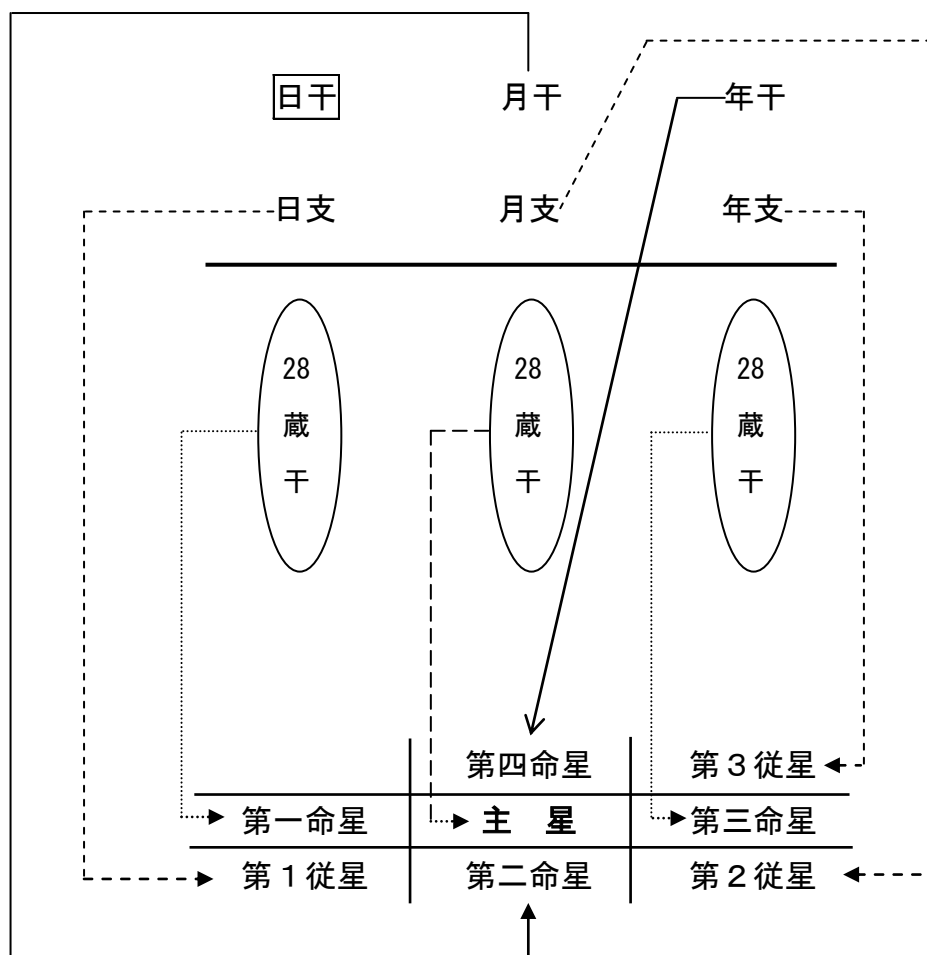
陰占



🔍 参考⇒【初年】 38回目【陰占宿命】 21 ページ

陰占「年干支」「月干支」「日干支」から、〔十大主星〕の星に直したときに、人体図のどの場所に配置するのかを表した図です。

星の変換（陰占から陽占）



	年 干	年 支
日支の歳干	月支の歳干	年支の歳干
日 支	月 干	月 支

『十大主星表』

- ① 日干から年干を見て 第四命星
- ② 日干から月干を見て 第二命星
- ③ 日干から年支の蔵干を見て 第三命星
- ④ 日干から月支の蔵干を見て 主星
- ⑤ 日干から日支の蔵干を見て 第一命星

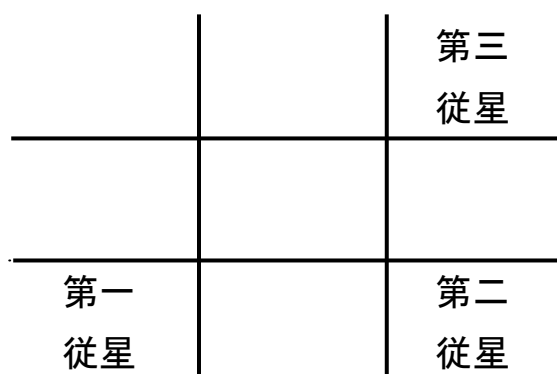
	第四 命星	
第一 命星	主 星	第三 命星
	第二 命星	

十大主星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	貫索星
壬	癸	庚	辛	戊	己	丙	丁	甲	乙	石門星
乙	甲	癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	鳳閣星
甲	乙	壬	癸	庚	辛	戊	己	丙	丁	調舒星
丁	丙	乙	甲	癸	壬	辛	庚	己	戊	禄存星
丙	丁	甲	乙	壬	癸	庚	辛	戊	己	司禄星
己	戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬	辛	庚	車騎星
戊	己	丙	丁	甲	乙	壬	癸	庚	辛	牽牛星
辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬	龍高星
庚	辛	戊	己	丙	丁	甲	乙	壬	癸	玉堂星

『十二大従星表』

- ① 日干から年支を見て 第三従星
- ② 日干から月支を見て 第二従星
- ③ 日干から日支を見て 第一従星



十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星

☞ 人体図には、五方向と五本能を配置できます。

生年中殺は、人体図のどの場所なのか見ましょう。

人体図		
	第四命星（北） 習得本能 年干	初年期の場所 第3従星 年支
第一命星（西） 攻撃本能 日支の蔵干	主星（中心） 魅力本能 月支の蔵干	第三命星（東） 守備本能 年支の蔵干
第1従星 日支	第二命星（南） 伝達本能 月干	第2従星 月支

北は習得本能、中心は魅力本能、南は伝達本能、東は守備本能、西は攻撃本能、このように配置されています。

『生年中殺』ですから、どこか中殺されています。人体図のなかで、中殺された場所からでてくるのはどれなのかと……考えるとわかりやすいでしょう。

宿命(3) 生年中殺 の年干「丁火」を十大主星になおした〔鳳閣星〕は、第四命星・習得本能にでてきます。二十八元の蔵干を十大主星に直した星は、第三命星の守備本能にでてきます。

それと、第三従星にでてきます。

つまり、生年中殺をもっていると、人体図のなかでこれらの場所が同時に中殺現象を起こします。

🔍 **十大主星表** と **十二大従星表** を参照してください。

⇒ 人物もこれらの場所に^あ当^はて嵌まります。

生年中殺は「年干」が中殺されます。「年干」を十大主星になおした星は人体図の第四命星(北)親の場所にでます。

(年支)も中殺されていますから、年支(巳)の二十八元の蔵干〔戊 庚 丙〕はすべて中殺されます。そのなかの蔵干1つが、第三命星(東)友人・兄弟の場所に十大主星としてでます。

生年中殺をもっていると、人体図のこれらの場所が同時に中殺を受けます。

(北) は親の場所

(東) は友人・兄弟の場所

⇒ 『十二大従星』の場所に関しては、特別な意味はありません。初年期の場所（第三従星）が中殺されます。第三従星に載っている十二大従星は中殺されます。

⇒ 人体図に五本能を配置できます。

そこで本能の話をしてみると、第四命星の習得本能、第三命星の守備本能に中殺の不自然さが現れます。

生年中殺の人は、習得本能と守備本能に、不自然・不完全な状態が現れる。

この部分は性格です（人物の話はすでにしました）。本能が異常になる、あるいは不自然になるということは、性格そのものを意味します。

⇒ 習得本能が異常になる……それはどういうことなのか？

習得を知恵とすればよいですね。知恵が異常になります。異常になりますが、[良いとか] [悪いとか]を問い掛けていません。

異常になるということは [すごく頭が良過ぎるか] あるいは [悪過ぎるか] ということです。

ふつうの状態ではないわけです。

良すぎるのも、悪すぎるのも異常です。

このような考え方をします。

生年中殺の人は第四命星・知恵の場所が不自然になりますから、とても頭が良いか、悪いかのどちらかになると考えています。

ものすごく頭脳が発達するというのも異常ですし、並はずれて頭が悪いというのも異常です。

このように大まかに頭が良いとか、悪いとかという分け方もできますが、その人のなかで〔すごく頭のよい状態のとき〕と〔悪い状態のとき〕がつくられるということも起ります。

〔たとえば〕Aの分野ではすごく頭がいいのに、Bの分野になると〔どうして知恵が働かないのだろう〕という人もおられるでしょう。

仕事はすごくできて、頭も良いのに、友達付き合いとか、人間関係になると、頭の良さを発揮できないということもあります。

お金の使い方にしても、借金してまで、なにかにお金を費^{つい}やしてしまうとかも含まれます。

「なにそれっ、おかしいって誰でもわかるでしょ、なんで渡すのよ」とか、ちょっと考えれば、誰でもわかることなのにダメされてしまう。というようなことも起こります。

また、時期によっても頭がよい、悪いという状態もでてきます。

〔たとえば〕若い頃に頭が悪かったと思える人なのに、中年になってから、すごい頭の良さを発揮する人がおられますし、その逆の人もいます。

子供の頃は“天才”といわれたのに、段々と衰えてしまう人もいます。そのようなことが起ります。どちらが先なのか……わかりませんが、このように、さまざまに異常な状態が起こるわけです。

その人にしてみれば、知恵がまわると思っていて、第三者もそう見ているのに、視点をチョット変えるとうまく知恵がまわらない。そのようなことも起ります。

⇒ 守備本能の異常は〔守りの異常〕です。

守りがものすごくうまい、守りが極端にへた、これはどちらも異常ということです。

それではどのようにしたらよいのか……ということになります。

これはつぎによようにも言えます。

中殺は“意図しない状態になる”わけです。

自分としては“こうなりたい”“ああなりたい”と

思い描くのは、〔まったく異なる様相^{ようそう}〕になるともいえますから、無心の状態が1番良いわけです。

中殺には ⇒ 意^い図^としない状態・無心が1番良い

参考・様相〔物事の状態。ありさま〕

参考・意図〔なにかを目指して、そうしようと考えること〕

参考・無心〔俗念や邪心にまったくとらわれない〕

それゆえに、学校の成績に関しても、成績を上げようと思って、一生懸命に頑張ると、思うように成績が上がらないことがあるとか……さほど努力していなかったけれど、自分の好きな科目をやっていたら成績全体が上がって来たということもあります。

本人が頑張れば、成績が上がるのが普通です。

しかし、勉強しても成績が上がらないというおかしな状態が起こりますので本人も困ります。

親もいろいろと、子供を応援するのですが、成績が上がらないので悩みの種になります。

このような場合の〔意図しないやり方〕としては、自分の好きな科目をやればよいと考えています。

そうしますと、自分が好きなので、意識しないでやれることに繋つながっていきます。

その結果、ほかの科目の成績も上がってくるということが起ります。

⇒ 第三命星は守備本能です。

自分の守りを固めるために、損失を生ずるおそれがある人物、嫌いな人物を近づけないというやり方というのは、意識したやり方といえます。

そのような守りをするのは、崩れくずやすい、壊れこわやすい守りになるのです。

そうではなくて、無心のままに、自分に近寄る人物を好き嫌いで差別しない、というやり方をすると、自然としっかりした守りになります。

そのときは堅固で強い守りになります。

〔たとえば〕“人に揚げ足をとられる”とかの状況は守りの欠如に起因していることが多いわけです。生年中殺をもつ人は、そのようにことも多いといえますので、意図せずは無心なると良いのです。

さて、〔無心がよい〕ということですから、頭が良いと評価されて成績が良くても、自分の頭の良さを^{こじ}誇示するようなやり方をするようになると、それに対しての反発も受けるようにもなるでしょう。

そうすると、「なに、この人ってぜんぜん違う……」頭の悪い人だと思われてしまうことにもなります。物事に対して――何も意識しないで向き合っていると、そこから^{かも}醸し出される雰囲気とか、行動などを第三者が勝手に評価して、頭の良い人だと思われてしまう状況も起ります。

この^{あた}辺りの現象は、中殺をもつ人の特質部分でもあると考えています。

宿命^{中殺}をもつ人と、宿命^{中殺}をもたない人では、世界が異なります。

“生きている世界が違う”といっても過言ではないでしょう。

宿命中殺をもっていない人には、わからないのです。

その意味で宿命中殺をもっていない人は、天中殺の勉強を通して [こういうことなのか……]

[こういう部分があるのか……] と理解していただければよろしいのです。

宿命中殺をもつ人であれば、これらの事象をご自分のこととして、認識できると^{おも}思います。

【初年】 57回目【天中殺(3)】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 58回目【天中殺(4)】 です。